

Voice GLOBE

Tokyo University of Foreign Studies

東京外国語大学

MESSAGE TO STUDENTS

学長の「声」／学生の「声」

INTERVIEW TO GRADUATE

私と“今”をつなぐ
外語大という存在

鈴木敬一【築地魚市場株式会社 社長】

夏目三久【日本テレビ アナウンサー】

村中大祐【指揮者】

寺田朗子【国境なき子どもたち 支援委員会代表】

山本浩【NHK 解説副委員長】

東京外国語大学初となる
広報誌のタイトルは
「地球」と「声(=人)」という
2つの言葉をあわせた造語です。

現在、世界はグローバル化に向かって進んでいます。
それは進めれば「地球」の様々な事、物、人が繋がっていくということ。
それらを知るのに必要不可欠なのが「言語」です。
ただし、「言語」というものは「地球」を繋ぐひとつのツールではありますが、
それを「声」にしない限り、意味を持ちません。

覚えた「言語」を「地球」を繋ぐ「声」にするためには、
「言語」そのものの習得と同じくらい、様々な国の文化・歴史などといった、
背景を知ることが重要になってきます。

「地球を繋ぐ声」を発することができる人材を育てること。
それこそが、東京外国語大学の使命であると考えます。

GLOBE

VOICE

学長の「声」 学生の「声」

大学とは、教員が教えることを学生が一方的に学ぶ場などではない。
教員と学生が教育研究の場を通してともに作り上げていくもの。
ここでは、学長と学生3人に、外語大について語り合ってもらった。
学生が発する率直な「声」に対して、学長が自らの「声」で応えていく。
そこから見えてくるのは、外語大のこれからの形。

亀山郁夫

KAMEYAMA Ikuo

1949年生まれ。東京外国語大学長。ドストエフスキー関連の研究のほか、ソ連・スターリン体制下の政治と芸術の関係をめぐる多くの著作がある。著書に「礎のロシア」「熱狂とユウフォルリア」「ドストエフスキー 父殺しの文学」「大審問官スターリン」ほか多数。





学長が日夜、大学運営や教育方針などについて、様々な考えをまとめる場所が、この学長室だ。

「言語」、コミュニケーションのためのツールとなりうるわけです。「言語」と「教養」、このどちらもこれからのグローバル時代には欠かせない要素です。

柴本…語学をしっかりとマスターしつつ、文化面でも、社会面でも、グローバルな教養を身につける。それが外語大の理想とする人物像ということなのでしょう。

学長…外語大というよりは、私の個人的な理想像の一つです。外語大全般ということになると、多少話が違ってきます。外語大が現在システムの根幹として持っているのは、あくまで「言語を教育する」ということですからね。外国語学部というのは、言語を核とした総合的な知識を教える場所です。そこで十分に得られないものは、学生に自発的に学び取って行ってもらいたいです。私個人としては、非常にどかしく感じる部分ではあるんですけどね。

ですから、今回のような学生の皆さんと直接対話する機会をもっと多く持つようにして、学生の皆さんに直接語りかけ、皆さんからの率直な意見を聞くことのできる場を作りたいと思っています。

朴…学長個人としては、今後どのような教育を取り入れたいとお考えですか？

学長…これは夢ですが、音楽教育を取り入れたいと思います。学生時代にしっかりと音楽を経験することは、非常に有意義なんです。音楽に限らず、非言語的なものに触れるという行為は、言語を学んでいる人間だけ

からこそ重要になってきます。個別の言語を学ぶという行為は、その宿命として「世界を分化」という要素を含ませざるを得ない。それに對し、音楽などの芸術の世界はいとも簡単に国境を越えて感動が伝わります。言語的なものを教育すると同時に、非言語的なものも教育も行う。これは私個人の教育についての信念でもあります。そして、その非言語的なものの代表が音楽であり、そういうものを通して、情緒豊かな人間になって欲しいと願っています。それから、映画と文学。これは言語的なものが中心となりますが、学生時代にたくさん吸収して欲しい。映画は夢を、文学は世界の仕組みを教えてくれるものだと思います。

朴…私はいま韓国の伝統音楽を演奏する活動をしているんですが、外語大は26カ国語を教えているんだから、例えば「26カ国それぞれの伝統音楽を学ぶ」といった授業があってもおもしろそうですね。

学長…大賛成です。私は以前「世界のオペラ」という授業をやってはどうかと提案したこともあるんですけど、その時は残念ながら実現できませんでした。今でもそういう情熱面での育成を中心にした授業をあれこれと考えています。「世界の食文化」という授業もおもしろいかもしれません。食文化という行為には独自の歴史や文化などが色濃く反映されていますからね。

さて、私の話ばかりしてしまいましたね。今度は皆さんに質問があります。外語大に対する質問、不満、要望などはありますか？

長田…もっと地域住民の方とのつながりを強くできないのかなと思ってます。私たちのボランティア活動は、小学校などに行って教えることが多いのですが、その逆ができないのかなと。外語大には様々な国の人がいるので、グローバル教育という意味でも、小学生や中学生などを大学に呼ぶことは意義のあることなんじゃないかなって思います。

学長…その通りですね。今でも様々な講演会などを学外の方に開放したりしていますが、そういった形だけではなく、大学という場を初等・中等教育のために積極的に利用してもらおうというのにも良いかもしれません。小学校、中学校、高校との連携、他大等との連携をもっと深めたいですね。
朴…外語大の卒業生は様々な分野で活躍している人が多いと思います。もっと、そういう人たちの経験談などを聴ける特別講義のようなものがあるとうれしいです。

学長…丁度いまその方向に向けての検討を始めているところです。マスコミ、外交、国際協力、国際交流などを始めとして、様々な分野の最先端で活躍している卒業生を積極的に大学に招いて、経験談などを交えた講演をしていただきたい。先人たちの活躍を知ることには、学生たちのこれからにとって非常に有意義なものだと思います。

柴本…新しい建物が建つと聞いていますが、一体どんなものになるんですか？

学長…異文化交流施設という位置付けで、ホールを造るんです。来年の1月頃に完成する予定なんです。500人収容できる大きなものになりますよ。
長田…そのホールはどういう用途で使われるんですか？

学長…授業、講演会、シンポジウム、その他の集会など、様々な用途で使っていきたいと思っています。そして、ホール以外の部分もあるんですが、その一部はみんなが集えるフリー・スペースとして使いたいですね。そこでちょっととしたコンサートや展示会などもやりたいですし、カフェ・スペースなども作りたい。学生の皆さんの発表の場として使っても面白いかもしれないですね。

是非、学生の皆さんには有効活用して欲しいというのがこちらの希望です。学校側として「スペース」自体は用意できますし、学生同士の自由なコミュニケーションを実現するための仕掛けなども用意したいと思っています。そこから先は、ある程度学生の皆さんの自主性に委ねたいと思いますので。

その場所に自然と人が集まり、専攻や学年などの垣根のないコミュニケーションションの場になって行けば良いなと考えています。

長田…建物の完成が楽しみです。でも、そこをどう使うかは、確かに学生である私たちにかけついていますね。学

のを一方的に待つのではなく、学生の方から何かしら仕掛けていけないか考えてみたいと思います。

朴…最後に、外語大の今後はどうなっていくのか、どうなっていくかなければならないのか、このあたりを学長はどのようにお考えになっていますか？

学長…「この大学で学びたいな」と思えるような場所にしていかなければならぬと思います。幸いなことに、外語大は「学生から見た居心地の良い国立大学ランキング」で第1位なんです。それは今後も絶対に維持していきたいと思えます。さらに、現状に安住せず、より発展させていきたいと思えます。その一環としてあるのが、先ほどのホールの建設であり、居心地ランキング私立部門で第1位の国際基督教大学との全面的な協力関係なのです。もちろん居心地だけでなく、学問を修める場としても魅力的な大学にしていきたいというのは当然のことですから、その面では、カリキュラム改革などを積極的に進めていきたいと考えています。





05: YAMAMOTO Hiroshi
Graduated from Dept. of German studies in 1976.



04: TERADA Saeko
Graduated from Dept. of French studies in 1975.



© Tetsuro Goto
03: MURANAKA Daisuke
Graduated from Dept. of German studies in 1990.



02: NATSUME Miku
Graduated from Dept. of Vietnamese studies in 2007.



01: SUZUKI Keiichi
Graduated from Dept. of Russian studies in 1959.

私と“今”をつなぐ 外語大という存在

外語大の卒業生は、当然ながら多種多様な職業に就いている。その職業の中にはもちろん「語学」を直接的に使うものもあるが、そうでない職も、実は多い。外語大で学んだ事柄を武器に、様々なジャンルで活躍する卒業生たち。彼らの外語大時代と、彼らの現在……。それを繋ぐものは、語学なのか？あるいはそれ以外の何かなのか？いずれにせよ、大学時代に得たものは大きいようだ。それらは、「今」に繋がる貴重な財産として、いまでも卒業生たちの中に息づいている。

- 01 鈴木敬一【築地魚市場株式会社 社長】
- 02 夏目三久【日本テレビ アナウンサー】
- 03 村中大祐【指揮者】
- 04 寺田朋子【国境なき子どもたち 支援委員会代表】
- 05 山本浩【NHK 解説副委員長】



鈴木敬一

SUZUKI Keiichi

Graduated from Dept. of Russian studies in 1959

【築地魚市場株式会社 社長】

「魚ばなれ」と言われる、
日本での魚の消費量の減少や、
マグロなどの資源保護、
漁獲規制の強化が叫ばれるなど、
様々な難題を抱える現在の日本の水産業界。
その魚介類流通の大きな窓口である、
築地魚市場株式会社を率いるのは、
昔気質の「魚一本槍」の人ではなく、
旧態然とした現状を打破する堅固な意志と、
柔軟な思考を併せもった人物だった。



まだ夜も明けきらぬ、早朝の築地市場の様子。この場所がもっとも活気であふれる時間帯だ。鈴木さんは、ほぼ毎朝欠かさずに、現場の様子を見に行くという。社員を鼓舞し、取引先と情報交換し、現場の声を今後の経営などに活かすためだ。

2月上旬の築地市場。吐く息が白い。魚河岸名物のターレと呼ばれる3輪の運搬車が忙しく通路を行き交い、場内の店舗ではすでに商いがはじまっている。その一角で、整然と並べられた巨大な冷凍魚を真剣な眼差しで品定めしながら、卸売会社と仲卸の目利きたちが静かにその動きを待つ。まだ日が昇る前の5時40分、カランカランカラン……手振りの鐘の音を合図に、あちこちから威勢の良いかけ声が飛び交う。東京、いや日本一熱気を帯びた取引がはじまった。マグロのセリだ。

年には世界の総人口が90億を超えるという予測もある中、日本の食糧自給率は40%。加速する世界的食料難を考えたとき、日本は当然、この手の豊かで恵まれた魚資源を活用しなければなりません。魚の消費を拡大するためには他食品に対する魚の優位性を認識してもらい、魚料理を食べてもらうための「食育」というのも我々に課された大事な役割です。漁業との関わりは1959年までさかのぼる。大洋漁業（現在のマルハニチロホールディングス）に入社して早々の4月、西カムチャッカで蟹工船に乗船することになった。

「森鷗外や国木田独歩といった日本文学からロシア文学まで、世界の文学に傾倒していきました。高校ではロシア文学への興味、さらに深まり、ツルネグフやドストエフスキーなどのロシア文学を読みふけていたのですが、「原文で読んでみたい」という気持ちが強くなっていきました。1955年に外大に合格。念願だったロシア語を専攻する。こうしてロシア文学との距離が一気に縮まり、文学そのものだけでなく、その背景も知りたいという想いが強くなっていったが、いざ入学してみるとロシア語との間には、大きなギャップが存在していた。

「正直、外大の授業は何から何まで詰り込んでしまいう傾向がありました。ロシア語についてはそれが顕著だったかもしれない。そもそもロシア語というのには、文法的にも見ても変化が非常に複雑な言語。一学年の半ばで、ゴリキーの『どん底』を読ませるような授業方針には、いま振り返ってみてもちよっと違和感を覚えます。やっぱり原文で読むというのはハードルが高いのですね」

「ロシア語の成績はいまひとつでした。語学というのは時間と努力に比例するもの。センスで大きく左右されるものではないですからね。一方で、イデオロギー、政治思想、経済社会問題、生き方など……引き出しは確実に増えていきましたね。人生を考える、仲間たちと語り合う時間があった。しかし、結局就職先では必要に迫られてロシア語を独学することになりますから、やっぱり後悔はしました」

受験では複数の大学に合格していたが、多数の学部と大量の生徒を抱えるマンモス校でなく、単科大学である外大を選択する。1学年400人、ロシア語学科は40人だった。

「環境に魅力を感じました。大きな大学は騒がしくてどうも落ち着かない。家庭的な感じが心地よかったです。家庭的な感じが心地よかったです。スモール・イズ・ビューティフル。この優位性はこれからも大切にしていてほしいですね。そして、語学を軸に歴史や文化の全体像を学べるようにしたいといけません。大きな階段教室での講義なんてあまり意味もないでしょう。大学だからこそ、少数で学ぶ環境が重要。それが外大にはあるはずですよ」

旧態然とした築地市場にメスを入れ組織改善に尽力してきた経営者は、学問の本質を説くと同時に苦言も忘れた。築地市場の移転問題、近い将来直面する食糧難という現実……漁業の現場から流通市場までを経験してきた鈴木さんは、今日も日本の台所から食文化を俯瞰し続ける。

語学だけでは物足りない それを軸に歴史文化全体を学べる環境を

鈴木敬一
SUZUKI Keiichi

1936年、静岡県浜松市生まれ。東京外国語大学 外国語学部 ロシア語学科卒業。大洋漁業(現マルハニチロホールディングス) 常務取締役、大都魚類株式会社 社長を経て、2004年に築地魚市場株式会社の社長に就任。

夏目三久

「日本テレビアナウンサー」

アナウンサーという職業には、
綺麗な正しい日本語で伝えるという前提がある。
仕事柄、つねにそのことを意識しているわけだ。
夏目さんは外大で、

「外国から見た日本」というものを肌で感じた。

そうして見えてきたのは、

日本人がいつのまにか曖昧にしてきた、

日本語の強さと美しさだった。

外大時代に得たそのことは、

いまでも夏目さんの仕事に活かしている。

NATSUME Miku

Graduated from Dept.
of Vietnamese studies
in 2007

日本テレビの昼間の帯番組「おもいっきりイイ!! テレビ」の収録スタジオ。テレビ画面から伝わってくるアットホームかつぎやかな情報番組のイメージとは違って、スタジオ内には生放送ならではの、ピンと張り詰めた空気が漂う。

絶対にミスの許されない生番組の緊張感……その極限の重圧から解放されて収録スタジオから出てきたのは、入社1年目の抜擢以降番組のアシスタントを続けている夏目三久さん。毎日その重圧にさらされながらも、明るいキャラクターと確かなアナウンス力、そして絶妙な仕切りで番組を支える、入社3年目を迎えた日本テレビのアナウンサーだ。開局55周年PRのための期間限定女性アナウンサーユニット「go! go! ガールズ」にも、入社1年目から局の顔として大抜擢されている。

だが考えてもみてほしい。新入社員がいきなりメインステージに送り込まれる職場環境は、プロスポーツの世界でも滅多に見られない稀なケースである。しかも、本来であれば仕事の悩みを相談できるはずの同期入社のアナウンサーがいない……孤独な戦いだっただけだ。

「職場に同期がいないなんて想像していませんでしたが、不安というよりはあまりなかったですね。外大時代から1人であることに慣れていたというか、それが当たり前前の環境でしたから、無意識のうちに鍛えられていたのかもしれない。校風もいわゆる華の女子大生」という感じとは程遠かったですし(笑)。学食で1

人で食べていても、変に浮いたりすることも少ないような環境でしたから。安心感を求め群れること、必要以上に干渉するようなこともなく、お互いが目標に向かって頑張っている……そういう自立を促すような校風の中で育ったこともあって、同期がいない入社1年目を乗り切ることができたのかもしれないね」

人間教育の面でもかなり影響が大きかったキャンパスライフのようだが、ところで関西出身の夏目さんが外大を受験した理由は、どんなところにあったのだろうか？

「中学、高校時代に能を習っていたこともあって、日本文化を掘り下げてみたかったんです。とくに、外国から見た日本に興味があった。外国の言語、歴史、文化みたいなものを学べばそれができると思ってた。外大を受験しました。アジアで中国に次いで将来性を感じていたこともあって、ベトナム語を専攻したんですが、あと雑貨や料理などが女性に人気だったこともありですね(笑)」

入学当初は周囲の語学力のレベルに圧倒されるなどかなり苦労したようだが、3年生からはもともと希望していた日本文化を学ぶゼミを選択していた日本文化を学ぶゼミを選択。約30人いる学生の半分以上が留学生という特殊な環境だったが、自分の甘さを痛感させられるなど、いろいろと気付かされるが多かった2年間だったという。

「ほとんどがアジアからの留学生。みんな日本語が堪能で、自国の文化はもちろんです。私も日本文化に詳しくはなかったりするので。意気込みが全

く違ってた。それに飲み会となると討論がすごく白熱して、「就職についてどう思う？」といったテーマでも、みんなしっかりと自分の意見があるんです。「で、わたしは？」と自問自答してみると、自分の国について語れなかったり、これといった志がなかったり……いろいろと刺激を受けましたが、ゼミ仲間から学ぶものは多かったんです」

一方で、語学の習得以上に(?)熱中したのが、フラスメンコ部の活動だった。

「恒例の外語祭と4月の発表会に向けて、ひたすらフラスメンコを踊っていました。池袋にフラスメンコ教室の先生がいたのでそこに週1回みんな通って習う以外は、基本的に学内での練習がメイン。1学年上の先輩に教えてもらうかわりに、私はひとつづつに教える。そこで体育会の厳しさや、先輩後輩との関わり方などを改めて学んだ気がします」

そんな学生生活を送る中で少しずつ芽生えてきたのが、日本の文化、そして日本語の美しさを表現したいという情熱だった。

「学問だけでなく部活も含めて外大で学んだことは、アナウンサーの道につながる部分が大きかったのかもしれない。外国の言語や文化を通して再認識した日本語の美しさを表現していきたい……そう考えたときに見えてきたのが、アナウンサーという職業だったんです」

今の時代、アナウンサーは発信者である一方で、表現者としての資質も必要とされる。

「バラエティ番組などは、アナウンス力だけでなく、豊かな表現力も必要とされる部分があったりします。そう考えると、フラスメンコで身につけた喜怒哀楽の表現力や度胸みたいなものは、いま役立っている部分が少ないのかもしれないね」

大学時代に想像していた未来の自分と現実の自分。誰もがそうであるように、夏目さんにも少なからずギャップは存在しているようだ。アナウンサーという特殊な職業に就いて3年目を迎えた今、1人の社会人として、改めて学生時代を振り返ってもらった。

「アナウンサーは原稿を読むだけ。実際のところそんな程度の認識だったのですが、甘い考えの学生でした。自分の言葉と視点で、情報を理解したうえで発信する……読むのではなく届けるためには、事象を理解するための見識が必要ですから、知識やアンテナ感度の不足を痛感していました。日本文化を集中して勉強しましたが、単科大とはいえ、外大では経済や美術、理系分野も履修できたのに……。学問の引き出しが多ければニュースの見え方も変わってきますから、幅広く勉強しておけばよかったと後悔しています」

24歳の女性として気付いたことを、自分の言葉で咀嚼して届けていきたいと語る夏目さん。日本文化の魅力や美しい日本語で届けたいという才色兼備な表現者の願いは、外大時代に培った知識と経験、自立心を原動力に、一歩ずつ現実のものとなって見えてくる。

あえて“日本の外”の側に立つことで再認識できた日本語の美しさ

夏目三久

NATSUME Miku

1984年8月生まれ。東京外国語大学 外国語学部 ベトナム語専攻卒業。2007年、日本テレビにアナウンサーとして入社。現在は「おもいっきりイイ!! テレビ」「1億人の大質問!? 笑ってコラえて!」など多数の番組で活躍中。

夏目さんは関西出身ということもあり、このアクセント辞典は手放せない必携ツール。ストップウォッチは、原稿読みの時間を計る時に使うのだという。

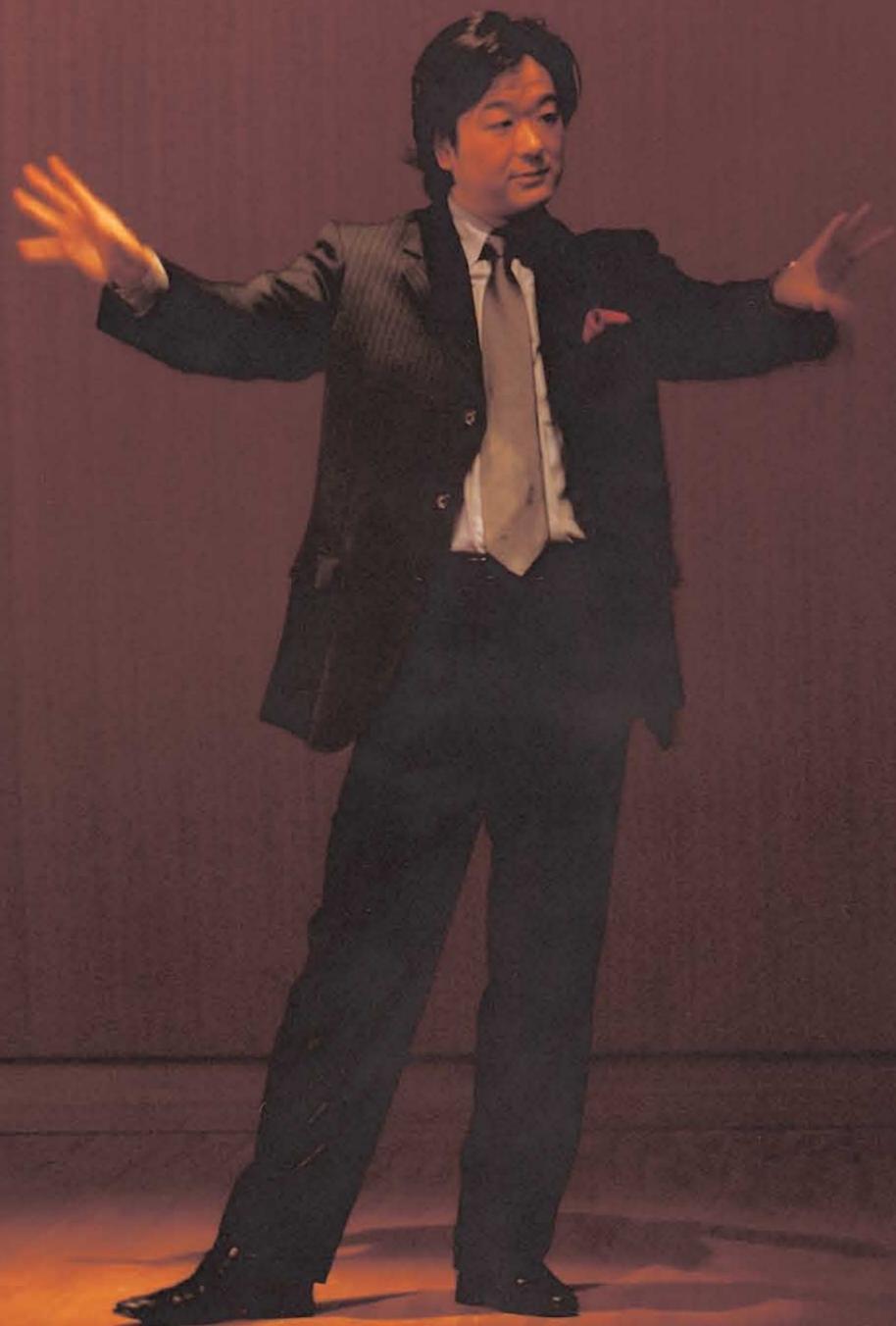
村中大祐

【指揮者】

村中大祐さんは世界的な指揮者、
音楽家である。
音大卒が一般的なこの世界において、
外大卒という経歴は異色だ。
外大時代に学んだドイツ語を、
音楽家になるための手段と位置づけ、
外大卒業後のウィーンでの
音大生活へと繋げていく。
そしてその先にある
指揮者としての道へも……。

MURANAKA Daisuke

Graduated from Dept.
of German studies
in 1990





村中さん愛用のタクトと楽譜。楽譜には自身の手で細かく書き込みがされている。村中さんは、タクトを使わずに手だけで指揮することも多いと言う。そのほうが思いがダイレクトに伝わるとか。

横浜みなとみらいホール主催のものと2006年からはじまった「横浜オペラ未来プロジェクト(OMP)」その企画・立案から携わり、横浜OMPオーケストラの芸術監督・指揮者を務めているのが村中大祐さんだ。オーディションで選ばれた若手の歌手や演奏家を、世界的レベルの指導者が指導・育成して、横浜から世界へ発信していくのがテーマ。そんな若い芸術家たちの育成という一面がある一方で、このプロジェクトの根幹を成しているのが、「横浜の音」、つまり地域独自の音を創り出すという壮大なコンセプトだ。

「私はなぜ横浜だったのだろうか?」ではなぜ世界中の街を歩いていつも感じるの、街の音であり、街の色、です。音楽家ですから、街の中に音楽を感じとれる場合も少なくありません。そういう場合必ずと言っていいほど河や海などの、水の流れが存在します。ウィーンやロンドン、ローマにドナウやテムズ、テヴェレがあるように、ヨコハマには港があります。思い返せば今まで港町で仕事をすることが多かった。ヴェネチアやトレヴィーゾ、ジェノヴァ、そしてパレルモなどです。特にパレルモは、歴史的に多民族による支配を受けたシチリア島の首都ですが、島の象徴とも言えるオペラ座、テアトロ・マッシモで数年間指揮した経験から、他のどの街よりも多くを得られたと思っています」

「小高い丘、そして正面に港があつて……そんなヨコハマの風景に改めて気が付きました。また7年暮らしたウィーンや10年以上を活動の拠点にしているローマで、自分の体に染みこんだ感覚……それを穏やかに受け入れてくれる懐の広さを感じます。そういう歴史的な背景がヨコハマにはあるのでしょうか。私が最初にヨコハマで音を出したのは、2006年のモーツァルト・イヤードでしたが、港町ヨコハマにふさわしい音として、モーツァルトにストラヴィンスキーを掛け合わせてみました。これもヨコハマの音を意識してのことです。アーティストには、街に降り立つたとき、「この場に何が合うか、どんな色や匂い、音があるか」を感じ取る感性が必要です。私の場合、習得した外国語が生きてきます。言葉が持つ響き、イントネーションやテンポといったものが、訪れた街の感覚として体に残るからです。私は仕事で外国語を使うことが日常ですが、標準語ではなく、できる限り方言を習得するように努力をしています。それは方言の中にこそ街の匂いが染みこんでいると考えているからです。でも忘れてはならないのは、外国語の裏にある文化を把握する上で一番必要なのは、自分にとっての日本とは何か?を自分に問い続けるということだと思います。結局のところ、外国に行くのも、外国を知るのも、すべては己れを知るためであり、日本人としての自分に立ち返るほかはないか

らです」

音楽はもちろん、物事の本質を解釈するために言葉が必要とする。ウィーン国立音楽大学で学んだ後、ヨーロッパ各地で指揮者として活躍するなど、言葉の持つ力を長い海外生活を通して実感してきた村中さんだが、語学力の礎を築いたのは外大時代だった。音大卒が一般的とされる中、この世界的指揮者、音楽家は異色の経歴を持つ。

「もともと4歳からピアノ、13歳からチェロを始めて、ピアニストになリたかったのですが、村中家からは皆に反対されましたよ」

だが浪人1年目の夏、予備校の英語教師が夏期講習の終わりに発した「男は好きなことをやれい」という言葉でハッと我に返る。まさにプレイクスルーの瞬間だった。

「すぐに母の師である声楽家佐々木成子先生のところへ連れて行かれたんです。『音楽は普通の大学でドイツ語をやってから目指せばいい』とのアドバイスで、外大のドイツ語を受験したというわけです」

無事外大のドイツ語学科に合格した村中さんだったが、入学後壁にぶち当たった。自分の好きな語学は何かと自問自答すると……

「自分の感覚とは、見事にドイツ語が合わない(笑)。授業さばって、フランス語の講義に出ていたこともありましたね。『自分は何が好きか』に正直な方だし、関西出身ですから、根がラテン系なんです。ドイツ語は響きは美しいんだけど、理屈っぽく思える。スペイン語やイタリア語など、

様々な言語で会話することで見えてくるもの それはアーティストの感性へのスパイス

村中大祐
MURANAKA Daisuke

京都生まれ。東京外国語大学 外国語学部 ドイツ語学科卒業。ウィーン国立音大に学び、これまでにフェニーチェ歌劇場、グライントボーン音楽祭、新国立劇場など世界有数のオペラ座に客演。コンサートでもロンドン、ミラノ、ブリュッセルなどヨーロッパ各地で絶賛される。2001年出光音楽賞、2007年ヨコハマ遊大賞受賞。ヨーロッパの国際コンクールで受賞多数。

寺田朗子

TERADA Saeko

Graduate from Dept.
of French studies
in 1975

〔国境なき子どもたち 支援委員会代表〕

現在、寺田さんは
NPO「国境なき子どもたち」の
支援委員会の代表をつとめ、
主としてアジア地域の困難な状況に
置かれた子どもたちの
現状を広く伝えている。
過去には「国境なき医師団・日本」
会長もつとめ、
ノーベル平和賞の受賞式にも出席した。
普通の主婦だった寺田さんに、
その活動のきっかけを与えてくれたのは、
外大で学んだフランス語だった。



「国境なき子どもたち」の活動目的は、ストリートチルドレン、人身売買の被害にあった子ども、自然災害の被災児など、世界中の恵まれない子どもたちに、この笑顔を取り戻すことなのだ。



1999年にノーベル平和賞を受賞したNPO法人「国境なき医師団・日本」(MSF・Japan)の会長を経て、現在はアジアの恵まれない青少年を支援するNPO「国境なき子どもたち」(Rnk)支援委員会の代表を務める寺田朗子さん。外大卒業後、主婦となった寺田さんだったが、MSFに関わるきっかけとなったのが、専攻していたフランス語だった。寺田さんは、1965年にフランス語学科に入学。今こそ外大は女子学生の割合が高かった時代だけに、男子学生が中心だった。「税金で勉強させてもらってる分、卒業後は社会に還元を」と、入学式当日に主任教授から言われ、しかと心に刻み込んだという。

卒業後は、母校の雙葉高校のフランス語教師になるって決めていました。大好きな母校でフランスの文化を伝え、所属していたバレエボール部のコーチになるんだって。もう、それしか考えていませんでしたね」

夢の実現のためにも「フランス文化を直接肌で感じたい」と、1967年、フランス政府国費留学生としてグルノーブル大学に留学。現地でも暮らし、学ぶことで改めてフランス語やフランス文化に魅了され、希望に満ちて1年後に帰国。ところが、復学後に待っていたのは学園紛争だった。パレードで建物も占拠され、学生自ら授業をボイコットするという状況が数か月も続いた。紛争の中心である「活動家」と呼ばれる学生は少数派だったが、日に日に

過激さを増していく異常事態に、多くの学生たちはなす術がなかった。授業に出られない日々が続くうちに、寺田さんは知人の紹介で知り合った男性と結婚。

「人生何がどうなるかわからないものですよ(笑)。結婚しても大学は卒業できると思っていたんですけど、結局子供が生まれてしばらく子育てに専念し、10年かかって28歳の時に卒業しました」

3人の子育てに追われる日々。夢だったフランス語教師になることも、勉強してきたことを社会に還元することもできず、一度も社会人経験がないまま月日が流れていった。ところが、1992年の秋、とある外大OBからの突然の連絡で状況が一変する。「知り合いが関わっているフランスのNGOが日本で事務所を設立するので、フランス語の出来る人を探している」という内容だった。

「たまたま私が手伝っていた同窓会の会報の編集後記に「フランス語学科卒で、バレエボールをしていた若くて元気な人が入りました」というようなことを書かれて。編集後記を書いた編集長と、そのOBの方が同期だったんです」

編集長を通じて連絡があり、紹介されたNGOが、当時は日本ではまだマイナーだった「国境なき医師団」だった。子育ても一段落した寺田さんは、「少しでもフランス語が役に立つのなら」と、手伝うことに。おもに担当していたのはフランス語のニュースレターの翻訳作業だ。まだ「ボランティア」という概念も浸透し

身につけたフランス語を 社会に還元したいという強い思い

寺田朗子

TERADA Saeko

1946年生まれ。東京外国語大学 外国語学部 フランス語学科卒業。1992年に「国境なき医師団・日本」設立の際、ボランティアとして参加。その後、同団体で会長、理事をつとめる。現在は「国境なき子どもたち」支援委員会代表。

山本浩

YAMAMOTO Hiroshi

Graduated from Dept.
of German studies
in 1976

【NHK 解説副委員長】

拮抗した好ゲーム、
緊迫したゴール前での攻防、
そして華やかなゴールシーン。
数々の名場面の裏にはいつも
名実況があった。
山本浩さんは、日本を代表する
サッカー界の名実況者。
様々な名シーンを
言葉によって彩ってきた。
伝えることのプロフェッショナルを
陰で支えたのは、
語学を学んだことで培った、
言葉に対する意識の高さだった。

——東京・千駄ヶ谷の国立競技場の曇り空の向こうに、メキシコの青い空が近づいているような気がします——

1985年10月26日、サッカーのメキシコW杯アジア最終予選の一番、日韓戦。当時の日本サッカーが世界に最も近づいたこの歴史的な一戦、後にサッカーの名実況で知られることになるNHKのアナウンサー、山本浩さんは中継の冒頭をこんな言葉からはじめていた。その後、Jリーグ開幕、ドーハの悲劇、ジョホールバルの歓喜など、日本サッカー史に残る歴史的瞬間には常にこの人の言葉があった。あまりにも有名な冒頭のフレーズが発せられた時、名実況史は幕を開けたのだ。

観客のいない静まりかえった国立競技場。数多くの名実況が生まれた放送ブースで当時を振り返る山本さん。アナウンサーを志すことになるきっかけは大学時代にさかのぼる。「外交官をしていた叔父が、外国での仕事の魅力をよく話してくれていたんです。人生観が変わると言われたこともありました。取材を受ける立場にもあったようで、ジャーナリズムの面白さも刷り込まれたんですが、じゃあ外国語をやってみよう。叔父の影響もあって、外大の受験を決めたわけなんです」

この時点では語学を活かすような卒業後の進路は考えていない。言葉はあくまで道具、杖でしかないと考えていたからだ。中学、高校時代に英語で挫折したこともあって、ドイツ語を専攻することになった。

「文法を掘り下げて文学を学ぶといったものではなく、ドイツ語を軸にそのまわりにある事象などを学びたかったんです。いずれにせよ、外国への扉を開いてくれる学校としての選択肢が外大だったわけですね」

そんな中でスタートした外大でのキャンパスライフだったが、まわりには高校時代からドイツ語を学んできた生徒も多く、いきなりカウンターパンチを喰らってしまふ。

「講師はハインツ・シュタインベルク先生という方。第一声からいきなりドイツ語でした。うるたえていいる余裕もなく、集中してないといついでいけない。とても厳しい授業でしたが、ドイツ語力の基礎はしっかりと身に付きました」

語学がカリキュラムの軸にある大学だけに、その挫折・放棄は、他大に比べて影響が少なくない。中学、高校時代には英語に関して自分の限界を感じたというが、ドイツ語を学ぶにあたって、そのときに似た心配はなかったのだろうか。

「語学へのアプローチや考え方、武器にするための意識レベルは高校とは比べ物になりません。甘えが許されない環境に身を置いたことは正解でした。教授との飲み会なんかも、居酒屋までの移動中の会話も当然ドイツ語。酒が入れば「君のドイツ語はおかしい」そんな議論ははじまります。コンパで楽しく飲んだ記憶がないんです（笑）。まさにドイツ語漬け。自主的に取り組んだというよりも強制的だったような……。高校時代までは教えられたことを吸収して、

評価につながる。しかし大学は評価が目的ではない。手段なのです。教えられたことをどうやって活かすか、それを道具として使えるようにするのが目的ですから。自主性が試される環境が大学時代ということでしょう」

3年からは鈴木幸壽教授の社会学のゼミを選択。「ドイツ的」な論法を背景に自分の課題を見つけていく。「非常勤講師の方がジャーナリズムの世界について臨場感のある話をしてくれて、とてもワクワクしましたね。その流れでゼミでは放送論をテーマにしました。ドイツ語科では3年の夏、シュタインベルク先生の帰国に合わせて、20人くらいが3〜4ヶ月間研修生として各所に送られました。自分の場合は、マンハイムという町のマンハイマーモルゲン新聞社が研修先になりました」

ジャーナリズムの基礎を学ぶ中で、暮らしか考え方といった現地ではわからないドイツ人の文化に触れる……貴重な体験だ。

「実際に体感して感じるものは、やっぱり違います。毛穴から入ってくるというか（笑）。でもやっぱりメディアの現場を知ったのは大きいですね。曖昧だったジャーナリズムというものの意識が明確になりました」

卒業後はNHKに就職。アナウンサーとして第一歩を踏み出す。ドイツ語を活かせる機会は多くなかったが、松山の放送局で実況の研鑽を積んでいた1983年、転機が訪れる。「サッカー日本代表が合宿を行って

いた松山に、ドイツ人コーチのベルティ・フォクツがやってきたんです。ドイツ語という武器を買われて取材を担当しました。ラジオやローカルニュースにレポートしたんですが、わくわくするような毎日でした」

その後東京のアナウンサー室に異動。日本ではまだマイナースポーツだったこともあって、若手のアナウンサーにも実況のチャンスがめぐってくる。そんな中で迎えた86年W杯メキシコ大会アジア予選、ついにW杯の実況をまかされることになった。そして日本代表が迎えた一番、冒頭の場面へとつながっていく。

「飾り立てないでほしい」と思いました。情感を込めたいとは思って、それでも無意識に音程は高くなってしまうでしたね。事前に番組冒頭のフレーズを用意することはしませんでした。スポーツ中継のテーマが流れている間に考えるんです。ここでは長いものは御法度。でも短くても印象に残らない。言葉には事実と意思をともに込めるんです」

山本さんのサインには、日本代表がW杯初出場を決めたジョホールバル決戦の中継で残したこんなフレーズが添えられる。

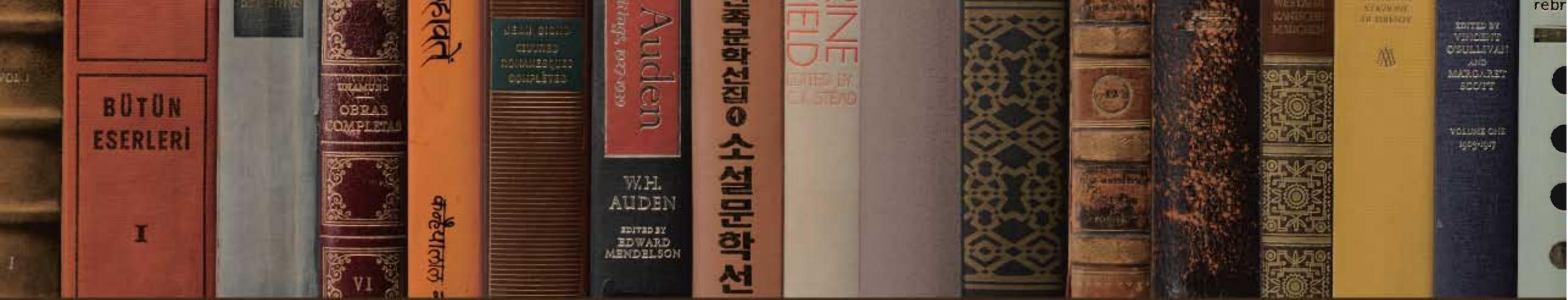
——そこにいるのは私たちです——
講師として後進の指導にあたる機会も増えてきたという山本さん。外大で培ったという語学力を芯とする「伝える力」は、後輩たちに受け継がれているようだ。とはいえ、やはりスポーツの名場面には、少し高めのトーンで発せられる、あの声が必要だ。

言葉を突き詰めて考え抜いた外大時代 名実況はこうやって生まれた

山本 浩
YAMAMOTO Hiroshi

1953年4月生まれ。東京外国語大学 外国語学部 ドイツ語学科卒業。1976年にNHKに入局。Jリーグ発足以前からサッカー実況に携わってきた、サッカー実況界のバイオニア的存在。2009年4月より法政大学スポーツ健康学部教授。

1986年のメキシコワールドカップのプレスIDカード。あの有名なディエゴ・マラドーナの5人抜き、そして「神の手」の興奮と熱狂を、真っ先に日本に伝えたのは山本さんの声だった。



GLOBE VOICE REPORT

外語大には様々な知識を持つ教授がいる。それぞれの分野のスペシャリストたちだ。
 その分野もまた、語学が中心のものから、文化、歴史などにいたるまで実に幅広い。
 自身の持つ経験や知識を学生に伝える外語大の教授たち。
 外語大を図書館に譬えたとしたら、教授陣は、“知”がたくさん詰まった蔵書のような存在だ。
 特別寄稿 GLOBE VOICE REPORT では、外語大の誇る“蔵書”の一部をご覧いただきたい



荒このみ

【東京外国語大学教授 アメリカ文学・文化専攻】

オバマ大統領の誕生と
ブラック・スタディーズ

2008年は、アメリカ合衆国の歴史だけでなく、おそらく世界の歴史に記憶される重要な年になりました。アフリカン・アメリカンのバラック・オバマが第44代アメリカ合衆国大統領に選出されたからです。だれもがまさかと驚愕した信じられない出来事でした。

私はアメリカ研究に長らく携わり、このところとりわけアフリカン・アメリカンの文学・文化研究に焦点を当ててきましたが、21世紀初めに黒人大統領が出現するとは想像できませんでした。昨秋11月に、シカゴのグラント・パークで行われた大統領受諾演説に参加していた多くの黒人たちが、感激に涙を流す情景が映像になって世界へ伝えられましたが、その姿は感動的でした。公民権運動を闘い、1964年の公民権法成立を獲得し、1968年にキング牧師が暗殺されたときには、そのかたわらにいて歴史の悲劇を目撃した、牧師で活動家のジェッシィ・ジャ

クソンが映し出されました。ジャクソンは涙を拭おうともせず、立ち尽くしていました。オバマに批判的だったジャクソンでしたが、自分たちの「アメリカの夢」を実現してくれたオバマに激励の拍手を送り、この歴史的瞬間を祝っていたのです。テレビ・パーソナリティで人気の高いオブラ・ウインフリーも群衆の一人になって会場にいました。オバマの受諾演説を聞きながら、みな至福のただなかにいたのです。

19世紀の奴隷制度廃止論者だった自由民デイヴィッド・ウォーカー(1785~1830)は、散文「ウォーカーの訴え」で、黒人奴隷の残酷で悲惨な状況を世間に訴えました。その中で、「黒人の大統領」の実例などない、そればかりか黒人の「知事、上院議員、市長、法廷弁護士」すらいないと、アメリカ社会の現実を突きつけました。それから200年近くを経て、黒人の大統領が現実となったのです。あまりにも長い時間の経過でしたが、それでもアメリカは変わりました。

ただ時間が経過したからではありません。19世紀の黒人活動家たちによってなされた、意識高揚の力強い演説を読むと、絶望的な状況であるにも関わらず、決して諦めずに黒人解放を求め、自由を求める、その骨身を削る努力の跡が見られます。20世紀後半には、ブラック・パワールの運動が黒人研究(ブラック・スタディーズ)を推し進めました。そのような学問はない、という揶揄と批判の声にめげずに、黒人の歴史・文化・文学・芸術を掘り起こす作業をしました。これまで沈黙を強いられてきた「アメリカの黒人の文化背景を知り、これらからアメリカ社会における存在証明を確認していったのです。」

オバマを支持した公民権法成立以降の若い世代は、20世紀半ばまで南部の現実だった、黒人差別のひどい実態を知りません。かれらは肌の色に関わらず、オバマ個人の能力と人間的魅力、大統領としての資質の可能性に投票したのでしょう。そのようなア



バラック・フセイン・オバマ。第44代アメリカ合衆国大統領。

荒このみ

ARA Konomi

東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了博士(文学) 東京外国語大学教授 4月1日より立命館大学客員教授 アメリカ文学・文化専攻
著書:『アフリカン・アメリカン文学論—「ニグロのイデオロギ」と想像力』(東京大学出版会、2004年)『歌姫あるいは騎士 ジョセフィン・ベーカー』(講談社、2007年) Ralph Ellison and Individuality (Nan'un-Do, 2008)

アメリカ社会の変化を反映したのが、2008年の大統領選挙でした。マルコムXの影響

バラック・オバマは高校時代に黒人作家や活動家の著作を読みふけています。母親が白人で、ハワイで白人の祖父と暮らしながら、自分のアイデンティティを確定するのは難しいことだったにちがいないと述べています。その中でマルコムX(1925~65)の言葉が、自分の感性に訴えるところが大きかったと、自伝「父親からの夢」で語っています。マルコムXは、黒人研究(ブラック・スタディーズ)を早くから奨励していた人でした。マルコムX自身は、第

8学年で学校教育を止めましたが、歴史を勉強しろ、黒人の文化を知るのだ、と常に演説で語り、周囲の人々を鼓舞しました。元奴隷として蔑視されてきた「アメリカの黒人」は、まず人間性を回復せねばならない。それには勉強によって「自分を知ること」が基本である。無視されてきた自分たちの文化背景を知ることによって自信を持つのだ、とマルコムXは繰り返し強調しました。

く知られています。いっぽうマルコムXが多くの名演説を残していることはあまり知られていません。その演説のひとつに、「投票権が弾丸か」というのがありますが、これは1856年、イリノイ州共和党大会でリンカーンが行った演説の「投票権は弾丸よりも力がある」という言葉を援用したものです。

マルコムXに関する記憶が薄いのは政治的理由によります。60年代初めのメディアはアメリカでも日本でも、マルコムXを一つのステレオタイプに嵌め込んで報道しました。すなわち「投票権」を獲得できないのなら「弾丸」に頼るといって、マルコ

ムXの言葉をデフォルメして喧伝し、指導者マルコムXは暴力的であるという印象を世間に刻んだのです。マルコムXが「ネイション・オブ・イスラム」という宗教団体の伝道師であったことが、「キリスト教国」のアメリカでは恐怖心をつらせた原因にもなりました。

ところがマルコムX自身は、一度も暴力に頼ったことはありません。黒人の自由という目的遂行のために武器を使用したこともありません。あくまでも「言葉」を「武器」に活動を展開しました。65年に暗殺されますが、その前年には、植民地主義に苦悩するアフリカ人との共闘を、

メディアや社会の規範に操られた像に、私たち受け手である学生、研究者まで左右されてはいけません。マルコムXについて研究を深めるにつれて感じています。60年代初め、「黒い回教寺院」と当時と呼ばれていた「ネイション・オブ・イスラム」や、「暴力的な」マルコムXについての、否定的な日本の新聞記事を鵜呑みにしていた高校生は、その後、いかにメディアや支配体制が、特定の人間の姿を歪めて報道するのを知ることになりました。

オバマ大統領の誕生は、黒人研究の発展と浸透、黒人研究を早くから唱えていたマルコムXの真実とその影響を教えてくれました。さらに教育の力の偉大さをあらためて認識させてくれました。



© AFRO PHOTO
マルコムX。「ネイション・オブ・イスラム」の伝道師。後に「アフリカン・アメリカン統一機構」の代表。



山田文比古

「東京外国語大学教授 現代外交論・欧州統合論・フランス政治外交論」

エピソード……①

その日、私は、じりじりと照り付ける沖縄の真夏の太陽の下で、目の前をゆっくりと歩いている男の後姿を見つめていた。

濃紺色のスーツに身を包んだ銀髪
の男は、30度を超える暑さと南海の
高特有の湿気にも拘わらず上着を脱
ぎようともせず、汗びっしょりになり
ながら、出迎えた人々や報道陣のカ
メラに向かって手を振っていた。

男の名前は、ウイリアム・ジェ
ファーソン・クリントン。第42代ア
メリカ合衆国大統領である。

前日まで、キャンプデービッドで
中東和平交渉の仲介を行っていたク
リントン大統領は、いったん交渉を
切り上げ、大統領専用機、エアフォ
ー



「平和の礎」を訪れた
クリントン・アメリカ大統領(当時)
を後方からエスコート。

スワンに飛び乗って、一晩で太平洋
を横切り、沖縄の那覇空港に到着。
直ちに大統領専用ヘリコプター、マ
リンワンに乗り換え、沖縄本島南
部の平和祈念公園「平和の礎(いし
じ)」に降り立ったのであった。

この日、2000年7月21日から
は、沖縄県名護市にある「万国津梁
館」で、G8サミットが開催される
ことになっていた。この会議に出席
するため、米大統領として40年ぶ
りに沖縄を訪れたクリントン氏は、
真つ先に「平和の礎」に向かった。

「平和の礎」には、太平洋戦争の末期、
日本軍と米軍との熾烈な地上戦が繰
り広げられた沖縄戦で命を失った
23万人の犠牲者一人一人の名前が刻
み込まれた石碑が建立され、その慰
霊と恒久平和を願う「平和の火」が
灯されている。祀られている犠牲者
の大多数は、戦闘の巻き添えとなっ
た沖縄の民間人であるが、当時敵で
あったアメリカの兵士も慰霊の対象
として含まれている。沖縄の人々の
平和への思いが凝縮された象徴的な
聖地とも言える。

今も米軍基地の重圧に喘ぐ沖縄の
人々のアメリカに対する感情は複雑
である。

濡れていた私の身体に、妙に心地よ
く感じられたことと合わさって、今
も忘れることができない。

エピソード……②

その日、私は、あるテレビ局のスタ
ジオの中で、たつぷり汗をかいていた。
スタジオの中は、確かにスポットライ
トの熱により多少暑くはあったが、こ
のときの汗はちよつと違っていた。

2007年1月某日、私は、フラ
ンスのあるケーブルテレビ局の企
画した日本特集番組にゲストコメン
テーターとして出演していた。特集
のタイトルは、「国際社会への復活
を目指す日本」とされ、イラクへの
自衛隊の派遣など国際貢献を進める
日本が、一方では、中国など近隣諸
国との間で依然として歴史問題を克
服しきれないでいるということが、
モチーフとなっていた。

この頃私は、在フランス日本大使
館で広報文化を担当していた。大使
館のスポークスマンとして、日本政
府の立場や政策についてフランス国
民に広報し、その理解を得られるよ
う努める、というのが与えられた任
務の一つであった。その場合、メイ
ディアを活用することが最も効果的であ
ることは言うまでもないが、なか



在フランス日本大使館
スポークスマンとして、
フランスのテレビ番組に出演。

であるが、その大統領に、平和を願
う「沖縄の心」を知ってもらいたい
というのは、保守・革新を問わず多
くの県民の率直な気持ちであったと
思う。1997年以降、外務省から
沖縄県に Outreach、外交・国際問題に
関する知事の補佐役のようなことを
していた私は、そうした沖縄県民の
気持ちを肌で感じ、何とか沖縄でG
8サミットが開催できないか、そし
てそれに参加する主要国の首脳に
「平和の礎」を見てもらうことはで
きないかと考え、その実現に向け奔
走していた。

そうして迎えた2000年7月21
日。私は、目の前を歩いているクリ
ントン大統領の後姿を見ながら、夢
の一部が実現したこと、そしてその
現場に自分も立ち会っていることに
よる高揚感を味わいつつも、すつき
りしないアンビバレントな感情を抱
いていた。その原因は、このあとク
リントン大統領が行う予定となつて
いたスピーチにあった。

その内容は、クリントン大統領が
実際に読み上げるまでは秘密とさ
れていたが、事前に私たち一部の関
係者には内々に通知されていた。ス
カこちらの思い通りの記事やニュー
スを流してくれるわけではない。誤
りや偏りのある報道がなされた場合
は、大使館として訂正を求めること
となるが、これもなかなか取り上げ
てくれない。新聞への投稿も同様
である。悪戦苦闘の毎日であったと
いっても過言ではない。

そうした中で、メディアに直接出
演することは、めったにないチャン
スである。ラジオのニュース番組に
は、スタジオでの収録や電話でのイ
ンタビューなどに応じて、何回か出
演することがあったが、テレビとな
ると、そう頻繁にあるわけではない。
この日の出演依頼についても、折角
の機会なので、大使館のスポークス
マンとして参加することにした。

番組には、私のほか、フランス人
の日本研究者とパリ在住の日本人の
フリージャーナリストも招かれてお
り、この3人のゲストコメンテーター
がそれぞれキャスターの質問に答え
るという形で討論が進められた。
話題は、日本におけるナシヨナリ
ズムや歴史修正主義の復活、歴史教
科書問題、過去を克服したドイツと
の対比、平和主義憲法改正の動き、
対イラク戦争の際に見られた対米追
随姿勢、など多岐に及び、私に対し
ては、日本政府の立場について厳し
い質問が向けられた。

小泉首相の靖国参拝とその後の中
国における反日デモ以来、日本のイ
メージは、時計の針が巻き戻された
かのように、過去の歴史と結び付け
られることが多くなっていた。この
負のイメージを、どう修正していくべ
きか。この日の番組でも、私は苦し

スピーチのテキストは、ホワイトハウ
スの先遣隊スタッフとして数週間前
から沖縄入りしていた大統領のス
ピーチライターが起草したもので、
沖縄の歴史上の人物の古詩を盛り込
むなどの工夫が凝らされ、少なくと
も修辭上は大変よく書けていた。

しかし、そうした美辭麗句とは裏
腹に、内容の面では分りにくい表
現が含まれていたことが問題であ
った。特に、沖縄県民や日本国民が最
も関心を持った米軍基地問題に関す
る対応について、「沖縄における米軍
の足跡(footprint)を減らすために、
引き続きできるだけの努力を行う」
と表現されていた点である。米軍関
係者の間では、「足跡(footprint)」
という言葉は、規模や範囲やインパ
クトの大きさの印象というニュア
ンスで使われるとされるが、具体性を
伴わない曖昧な表現であって、一般
には極めて分かりにくい。

私は、密かに、この表現の問題点
を米側の関係者に伝えたが、とき既
に遅し。沖縄に向かうエアフォ
ーワンの中でクリントン大統領が目を
通し、了承済であるので、テキスト
の変更はできないとの返事であった。

い弁明に努めなければならなかった。
そして、収録が終わったあとに残
ったものは、たつぷりの冷や汗であ
った。

外交の世界は、一般的には華やか
なものに見えるようだ。しかし、実
態はそうでもない。仕事である以上、
やはりきつい。やっている人間には、
それなりに葛藤もある。そのことは、
先に紹介したエピソードの例で、少
しは感じ取って頂けたのではないか
と思う。

本学を出て、外交官になった人は
多い。外務省専門職試験だけを取
つても、過去30年間で何と164
人もの本学卒業生が採用されており、
この実績は大学別で第1位である。

そして外交を担う立場に立つに
せよ、あるいは外交を批判する立場
に立つにせよ、本学出身者は、何ら
かの形で外交や国際関係に携わっ
ていることが多いと思われる。

私自身は、本学出身者ではないが、
1980年に外務省に入ってから、
30年近く外交の現場に身を置いてき
た。その経験を踏まえ、昨年から本
学で国際関係論(現代外交論と欧
州統合論)を講じている。
国際関係論を学ぶにあたり、理論
や歴史を学ぶことは必須である。し
かし、それだけでは捉えられない
「何か」があるということ。「現場」
は教えてくれる。昨年は、自らの外
交官としての経験を語ることに若
干引け目を感じていたが、2年目に
入った今年は、むしろ現場の息吹を
伝えていくようにしていきたいと考
えている。

山田文比古

YAMADA Fumihiko
1954年福岡県生まれ。1977年フ
ランス・ストラスブール政治学大学院
1980年京都大学法学部卒業後、外
務省入省。1983年フランス国立行
政学院(ENA)外国人特別課程修了。
1997年沖縄県知事公室参事兼サ
ミット誘致推進プロジェクトチーム
1999年沖縄県サミット推進事務局
長。2000年外務省欧亜局西欧第1
課長。2002年フランス国際関係研
究所(IFRI)客員研究員。2003年駐
フランス公使。2008年4月より東
京外国語大学教授。著書に「フラン
スの外交力」(集英社新書、2005年)



日本社会の多言語・多文化化に伴う政策課題の考察

— 外国人集住都市の市長から大学教員になった立場で —

北脇保之「東京外国語大学教授 多言語・多文化教育研究センター長」

語多文化教育研究センター」である。

浜松市長としての経験

浜松市は、外国人人口が総人口82万人の約4%を占める外国人の多いまちである。特に、ブラジル人は約2万人が居住し、全国で最もブラジル人の多いまちとなっている。このような都市の市長として、私は、在任中積極的に在住外国人に関する政策を推進した。現在の本学多言語・多文化教育研究センター長としての活動の原点には、この浜松市長時代の経験がある。

浜松市は、古くからのづくりが盛んであり、繊維、楽器、輸送用機器などの製造業を中心に発展してきた。スズキ、ホンダ、ヤマハなど輸送用機器、楽器産業部門で世界的に名の知られた国際企業が立地している。前述した1990年の入管法改正施行以来日系南米人が急増し、その多くは地域の輸送用機器等の工場に勤め、地域経済にとって不可欠な存在であった。私が市長に就任した頃すでに、地域において外国人の存在は当たり前のものとなっており、休日には街中に出かければ大勢のブラジル人たちがとすれ違うという状況で

急速に進む日本社会の多文化化と本学の対応

外国人登録者数を見ると、2007年末には215万人で過去最高となり、総人口に対する比率は1.69%となっている。これは、10年前の約1.5倍、約20年前の1985年の約2.5倍である。国籍出身地別に見ると、中国が最大で60万人（全体の28.2%）、次が韓国・朝鮮（同27.6%）、以下ブラジル、フィリピン、ペルー、

米国と続いており、従来最大グループであった韓国・朝鮮が2007年末統計で初めて第2位となった。このような在住外国人の急増と国籍（出身地）別構成比の顕著な変化をもたらした政策的要因は、1990年に入管法（出入国管理及び難民認定法）が改正施行され、日系人2世、3世およびその配偶者が「定住者」または「日本人の配偶者等」という就労に制限のない在留資格で来日できるようになったこと、またこれと併せてアジアなどの開発途上国から研修生を受け入れる「研修」制度（のちに「技能実習」が付け加えられ「研修・技能実習」となり、現在また制度改正が検討されている。）が設けられたことにある。外国人の移住については、過去においても、またこの国、地域においても、多かれ少なかれ言語・文化・社会習慣などの違いによる摩擦、軋轢や時には紛争を伴うものである。日本の場合、先述の外国人大幅受入れ政策を導入した際、滞在が長期化し、定住化することを想定した受入基盤の整備を怠ったために、外国人の雇用、社会保障、日本語教育、子どもたちの教育、行政サービスの享受などをめぐって重大な問題が発生して

いる。さらにこの問題は、昨秋以来の世界同時不況の中で、非正規雇用の外国人労働者が解雇され、職ともにも住居を失う事態が続出するに及んで一層深刻化している。他方、こうしたいわゆる「ニューカマー」にもなる問題とともに、在日韓国・朝鮮人など「オールドカマー」が直面してきた差別や排除の問題も依然として解決しておらず、このような人権に関わる問題は、ニューカマーも含めた日本社会の新たな多言語・多文化化の局面のなかで、改めて問い直すべき課題となっている。

グローバル化による国境を越えた人の移動の活発化に伴い、外国人あるいは移民と社会の関係をめぐる問題は、世界各国・地域共通のものとなっている。社会の課題に對し常に鋭敏な意識を持ち、知的探求を通じて課題の解決に貢献することを使命とする大学にとって、「多言語・多文化社会論」は今日最も重要な対象領域のひとつである。本学は、これまで世界諸地域の言語・文化・社会に関する教育・研究に実績を積み重ねてきたが、日本社会の多言語・多文化化の急速な進展に對し、この分野で教育・研究および社会連携を推進するために設置されたのが、「多言

会保障、外国人登録等諸手続きの改革を求める「提言」をまとめ、国などに對し、その実現を要請した。以後、同会議は幹事市を交代しながら活発な活動を展開しているが、国の対応は遅々たるもので、外国人雇用状況届出制度や新しい入管制度および外国人台帳制度など入管管理の面で進展が見られるにすぎない。

外国人集住都市会議

の方針に基づき、市は、多言語情報提供や外国語対応職員の窓口配置をはじめ、外国人市民会議、地域共生会議、外国人就業関係研究会の設置、外国人市民生活相談、外国人児童学習支援、日本語教室、日本語ボランティアの育成、市立高校へのインターナショナル・クラスの設置、外国人学校への支援など様々な施策を推進した。

日本の外国人政策の問題点

多言語・多文化教育研究センターに職を得てからは、さまざまなシンポジウムなどでの議論や外国人・移民政策に関する文献研究を通じて、自身の市長時代の経験を振り返りながら日本の外国人政策について考察を続けている。その結果として言える日本の外国人政策の問題点は、まず第一に明確な社会ビジョンに基づく出入国管理政策がないことである。国の公式な政策では、今後

の政策を明確にせず、自治体に任せきりにしている状態である。今日日本にとって必要なことは、明確な社会ビジョンに基づく出入国管理政策と社会統合政策からなる一体的な外国人政策を確立することである。

あった。しかし、外国人と元からの市民の間の交流や相互理解は進んでおらず、後者の中には「外国人が大勢かたまっていて何となく不安を感じる」という声があった。私にとって特に重く響いたのは、外国人の市政に対する意見・要望を聞くために開催した懇談会で、一人の外国人参加者が言った「このような意見を聞く会はこれまで何回もあり、そのたびに自分たちが困っている問題をなんとかしてほしいと言ってきたが、いつもそれっきりで実際には何にも変わらない」という言葉だった。このような状況の中で、私は外国人の存在をどのように認識し、市政の中に位置付けるかは、市政の最重要課題の一つだと考え、次のような基本方針を表明した。すなわち、「日本人も外国人も同じ浜松市民である」という認識の下、外国人市民が経済など地域に貢献していることを正しく認識したうえで、生活習慣の違いによる摩擦などのマイナス面を極力抑制し、外国人市民の有する文化の発現を進めることで地域社会を豊かにする」というものである。こ

以上のように、外国人市民に直接接する地方自治体としてできる限りの施策を講じたが、外国人の直面する問題は、根本的には国全体の制度や社会システムの不備に起因しているため、到底一自治体の取組だけでは解決できない。外国人労働者は派遣・請負業者に間接的に雇用されているため、派遣先の生産調整によって簡単に職を失い、日本語や技術が身に付かないこと、社会保障と国民健康保険のどちらにも入れず無保険になる者が多いこと、公立学校に適應できず不登学になる子どもが多いことなどはその最たるものである。そこで、ニューカマーが多数居住する都市が連携すべく、2001年、浜松市が呼びかけて「外国人集住都市会議」を設立した。会議は、「日本人住民と外国人住民が、互いの文化や価値観に対する理解と尊重を深める中で、健全な都市生活に欠かせない権利の尊重と義務の遂行を基本とした真の共生社会の形成」を目指す「浜松宣言」を採択するとともに、最重要な政策課題として、教育、社

造業はおろか農業・水産業でも不可欠な労働力となっている現実とも矛盾する。党派を超えた国民的な議論によって将来の日本社会のビジョンに関するコンセンサスを形成し、それに基づく出入国管理政策を策定するべきである。

また、第二の問題点は、国の政策として、在住外国人が外国人であるが故の不利や排除によって社会の底辺に落ち込むことを防止あるいは阻止する過程としての社会統合政策がないことである。ドイツやオランダなどのEU諸国では、長年の移民受入とその失敗の経験から、社会の中に外国人によるもう一つの平行社会を作らないため、この社会統合政策に積極的に取り組んでいる。日本では「多文化共生政策」の名の下に、一部の自治体を実質的な社会統合政策を実施してきたが、国はこの分野の政策を明確にせず、自治体に任せきりにしている状態である。今日日本にとって必要なことは、明確な社会ビジョンに基づく出入国管理政策と社会統合政策からなる一体的な外国人政策を確立することである。

世界同時不況の中で

昨秋のいわゆる「リーマン・ショック」以来、輸送用機器や電気機器などの製造業では全国的に非正規雇用労働者の大量解雇が行われている。浜松市でも多くの外国人労働者が解雇され、職とともに住居を失うなど非常に厳しい状況に立たされている。今こそ日本の外国人政策を大きく転換すべき時である。



外国人生徒のための日本語教室の様子（浜松市）。



2009年4月 大学院総合国際学研究所 発足

*

現在の大学院研究科の名称を、「地域文化」から、グローバル化時代を反映した総合的な取り組みを強調する「総合国際学」と改めます。

博士後期課程における、より専門性の高い教育研究体制の実現と、教育課程の編成にさらなる一貫性を持たせるため、大学院地域文化研究科博士後期課程における1専攻を、言語文化専攻と国際社会専攻からなる2専攻に改めます。

大学院における教育研究の重点化と柔軟な学部運営を実現するため、これまで学部と大学院に分かれて所属していた教員が、そろって大学院（総合国際学研究所）に所属し、一体となって学部・大学院双方の教育に取り組みます。

*

総合国際学研究科では、

- I) 世界諸地域の言語・文化・社会に関する専門知識、全地球的な視野、深い教養を備えた研究者、高度教養人の育成
- II) 柔軟な異文化理解と高度のコミュニケーション能力をもち、実社会で十二分に活躍できる高度職業人の養成の2つの目標を追求します。

博士前期 4 専攻	コース	博士後期 2 専攻
言語文化専攻	<ul style="list-style-type: none"> ・言語・情報学専攻コース ・文学・文化学専攻コース 	
言語応用専攻 ▶ 高度職業人養成系	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語教育学専攻コース ・英語教育学専攻コース ・言語情報工学専攻コース ・国際コミュニケーション・通訳専攻コース 	言語文化専攻
地域・国際専攻	<ul style="list-style-type: none"> ・地域研究コース ・国際社会研究コース 	
国際協力専攻 ▶ 高度職業人養成系	<ul style="list-style-type: none"> ・国際協力専攻コース ・平和構築・紛争予防専攻コース 	国際社会専攻

東京外国語大学出版会 いよいよ刊行スタート!

*

2008年10月に発足いたしました東京外国語大学出版会では、

- ① 一般向けの教養書として位置づけるオリジナルな叢書
- ② すぐれた研究成果をまとめた学術書（人文書・専門書）
- ③ 豊かな教育実践から生まれた教科書（語学教科書・概説書など）

を3本柱に、本学教員の研究教育活動の成果、本学の特色である国際性・学際性に富んだ企画、また社会的関心の高いテーマを扱う企画など、教員のエディタースhipを發揮した出版活動を展開してまいります。

刊行第一弾
好評発売中!

「ドストエフスキー 共苦する力」

亀山都夫 Picria Books

いまなぜ、ドストエフスキーなのか。「カラマーゾフの兄弟」「罪と罰」「悪魔」「白痴」の四大長篇の深奥に分け入り、そこに隠された無数のメッセージを多様に読み解きながら、神なき時代に生きる現代人の救いのありかをさぐる。
四六判・定価：本体1400円+税（送料別）

「身体としての書物」

今福豊太 Picria Books

ボルヘス、ジャケス、ベンヤミン、グリッサンらの教訓的なテキストを読み解きながら開示される、「書物」という理念と感懐をめぐる新たな身体哲学。本学のゼミナールから生まれた画期的な書物論、全14篇！
四六判・定価：本体1600円+税

「中上健次と村上春樹（歴大〇年代）的世界のゆくえ」

柴田勝二

現代日本文学を疾走してきたふたりの作家は、時代とどう向き合い、時代をどう讀んできたのか。相異なる作風をもつ両者の差異と重なりを鋭密に読み解き、ポストモダンの雑相を浮かび上がらせる意欲的文学論！
四六判・定価：本体2500円+税

*お求めはお近くの書店にご注文ください。

*

東京外国語大学出版会

T 183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 東京外国語大学附属図書館内

TEL: 042-330-5558 / FAX: 042-330-5199

e-mail: tufspub@tufs.ac.jp

<http://www.tufs.ac.jp/common/tufspub/>



Special Thanks

築地魚市場株式会社
日本テレビ放送網株式会社
横浜みなとみらいホール
特定非営利活動法人
国境なき子どもたち (KnK)
国立競技場
広報マネジメント室
©東京外国語大学 2009